

第1章 庄・蔵本遺跡・医学系総合実験研究棟Ⅲ期 改修その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

第1節 調査の概要

国立大学法人徳島大学蔵本キャンパスでは、こんにちまでに、22次にわたる調査を実施している（第2図）。すでに、今までの調査で、弥生時代前期を中心に全国的にも注目される成果を蓄積してきている。たとえば、第6次調査では弥生時代前期の墓域を調査し、第1～3、15次調査では貯蔵穴、土坑群を調査している。さらには第5・7・9・10・13・16次調査では用水路網、第17次調査では水田跡と、弥生時代前期の集落像を、ほぼ復元しえるほどの成果をえている。今回の調査地点は、その第21次調査に相当する（第2図）。

調査の目的は、医学系総合実験研究棟Ⅲ期改修工事にかかわる貯蔵施設の埋設である（第2図21）。調査面積45m²で、調査は2007年10月22日から11月7日までおこなった。調査は、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 定森秀夫総合科学部准教授）が担当した。現場担当者は、定森・中村豊（大学開放実践センター助教）・中原計（埋蔵文化財調査室助教）で、板東美幸（施設マネジメント部技術補佐員）がこれを助けた。

第2節 調査の成果

本調査では、2枚の遺構面を調査した。以下、順に成果の概要を述べることとする。

（1）第1遺構面

最上面では中近世の溝2条（SD01：第5図中段・SD02）を検出した（第3図上）。

（2）第2遺構面

近世遺構面のベースをなす黒褐色シルト層は、土壌化の進行が著しく、長らく地形環境が安定し、地表面として機能していたことを看取できる。土壌化部分を取り除いた、黄褐色シルト層上面にて検出した。その結果、黄褐色シルト層上面において、弥生時代後期後葉～終末期の開析流路SR03を検出した（第3図下）。流路は東側の端部こそ検出できたものの、西側は、調査区の外まで広がっていたと考えられる。幅10m、深さ2mほどの規模に復元可能である。

開析流路SR03の土層（第7図中段）は、下層の下位部分に砂礫の堆積がみられるものの、下層の中位部分はシルト、中層～上層は、グライ化した粘土層で占められていた。すなわち、流路の開析当初は、強い流水がみられたものの、やがて弱くなり、遺物が多量に投棄されたのちは排水不良気味になってその役割を終えたものと考えられる。

出土土器の大半は、弥生時代後期後葉～終末期のもので、これを、開析流路の所属時期決定の根拠としている。下層中位～上層部分からの出土は、ほぼこの時期のものに限られる。下層下位の流水層部分からは、弥生時代前期末・中期初頭の土器や、弥生時代中期後葉の土器の混入が認められる。

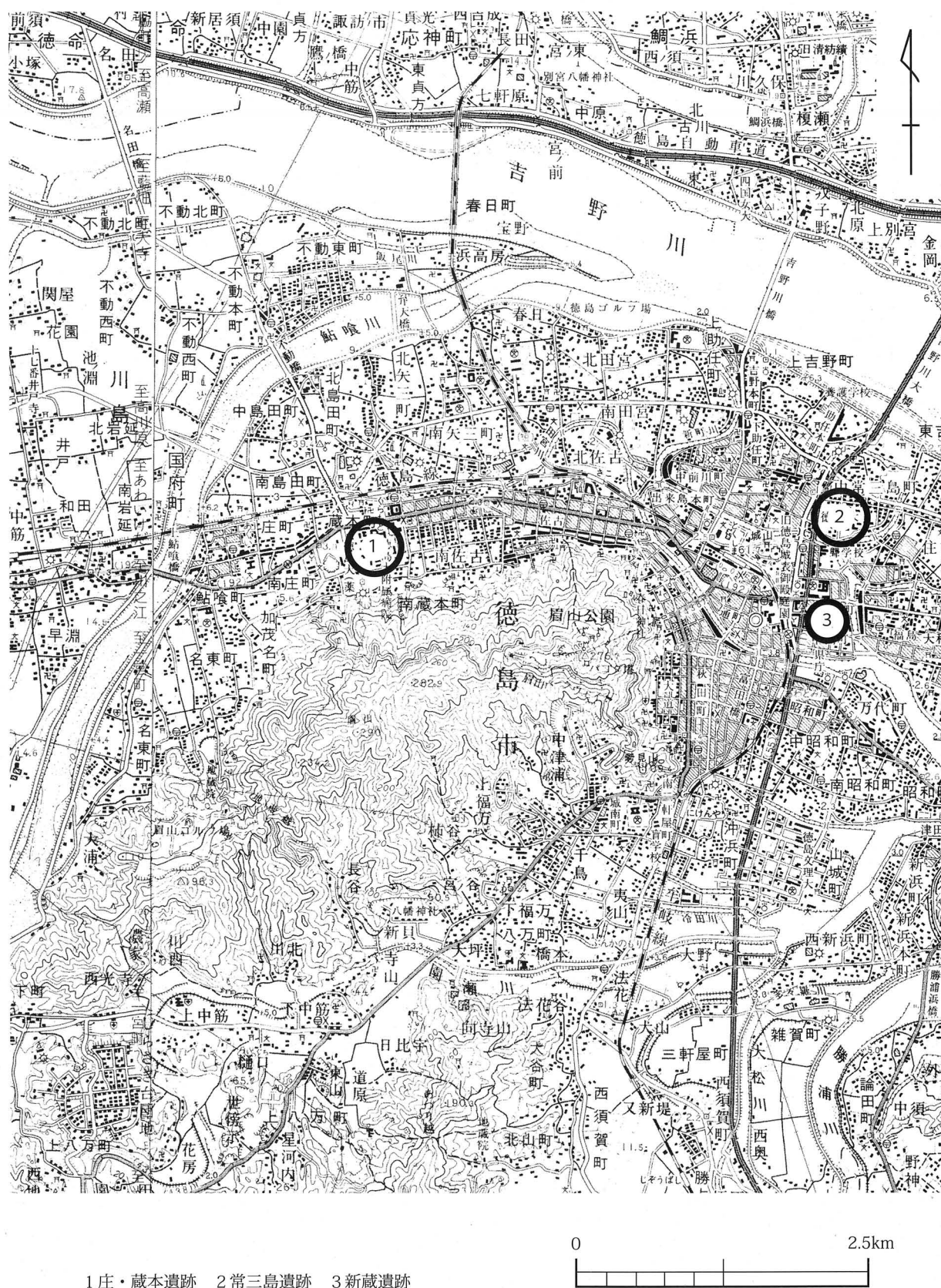
第3節 出土遺物の概要

今回の調査では、狭い調査面積にかかわらず、コンテナ13箱分の資料が出土した。そのほとんどが開析流路SR03からの出土である。

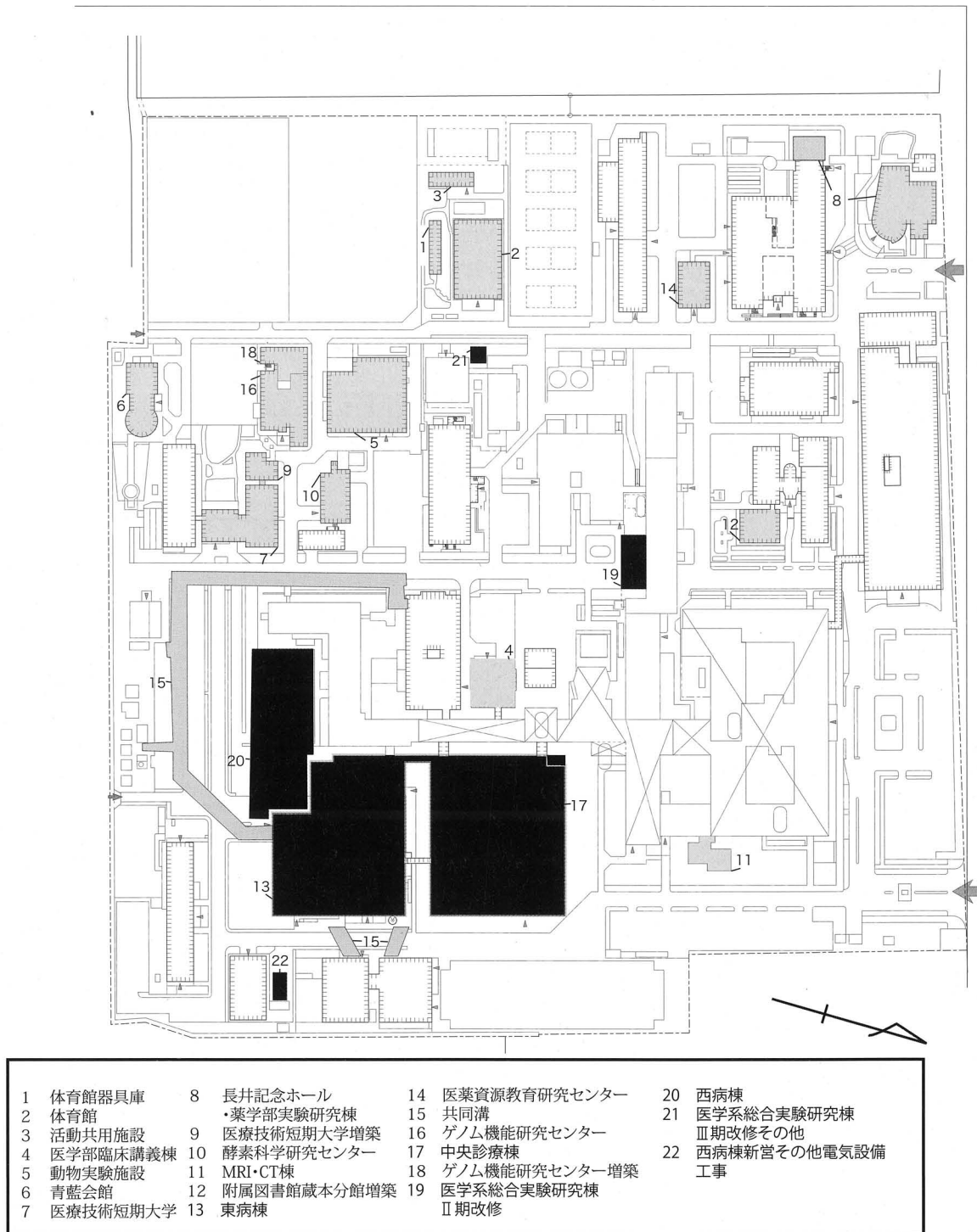
土器の大半は弥生時代後期後葉～終末期のものである。

石器は、敲石と台石・砥石類が大半を占める。いずれも鉄器生産との関わりを推察しえるものである。

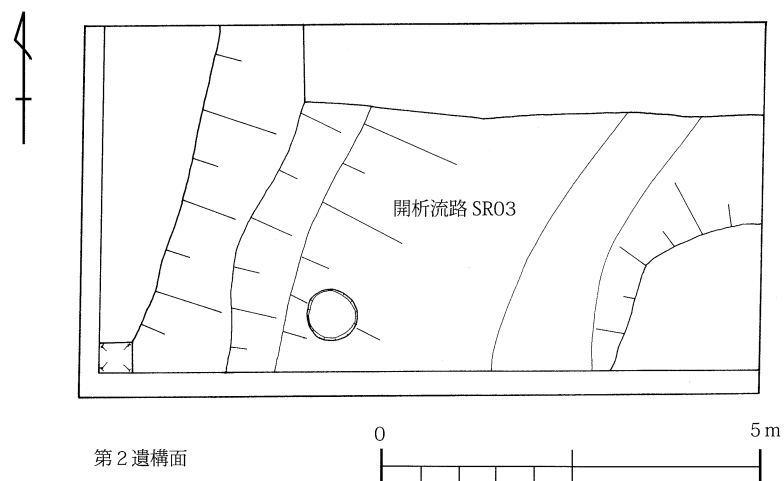
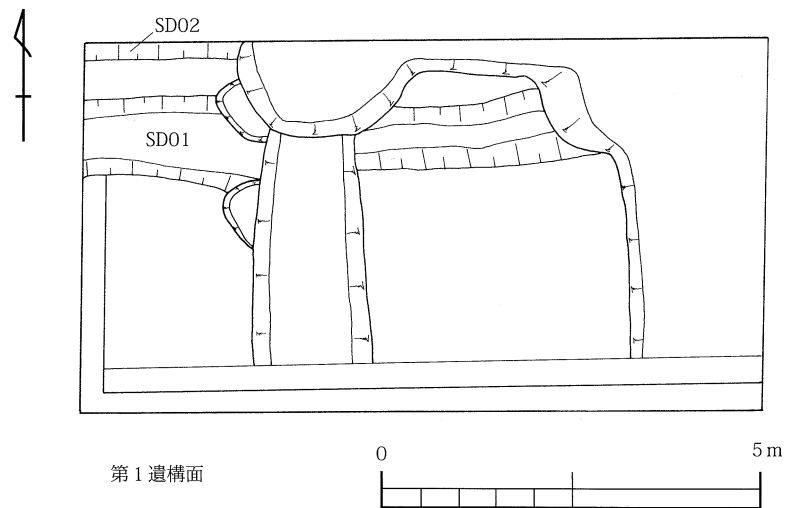
木器は、いわゆる「ナスビ形木製品」である曲柄鍬2点（うち1点は又鍬：第6図下段）、広鍬1点、堰構築材1点（第7図上段）などが出土している。



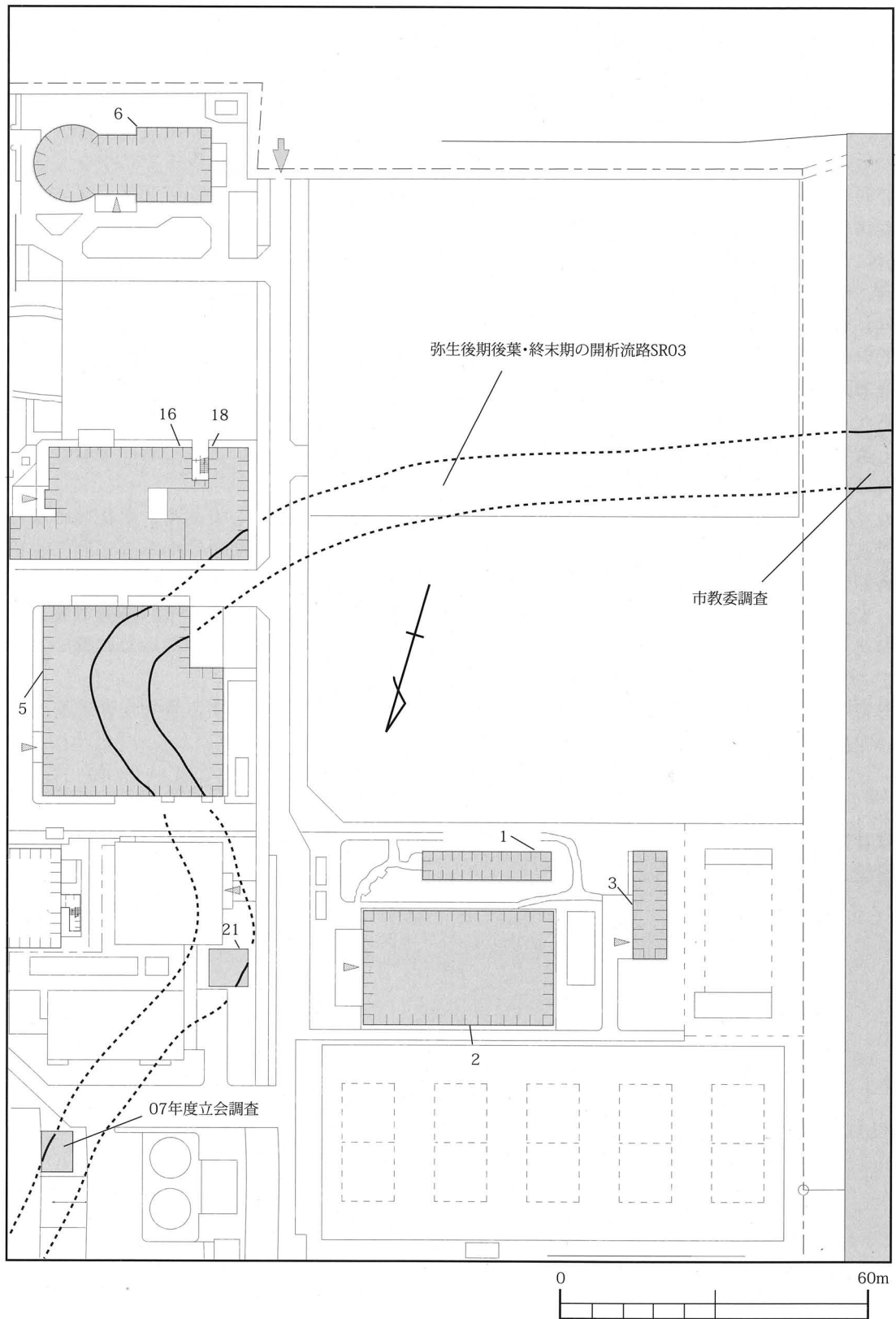
第1図 徳島大学構内遺跡の位置



第2図 蔵本地区調査地の位置 (S=1:3,000)



第3図 遺構平面図



第4図 開析流路SR03復元図

第4節 まとめ

今回の調査で検出した開析流路SR03は、第5次動物実験施設地点、第18次ゲノム機能研究センター増築地点において検出した流路と同一のものと考えられる(第4図)。この流路は大学構内南西隅付近(徳島市教育委員会調査)から東北東方向に流れ、第18次調査地点の北西隅を、北方向に向きを変えながらかすめて、その北に隣接する第5次調査地点(徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2008)を経由しつつ今回の調査地点に達している。第18次調査地点から今回の調査地点までに少なくとも2回は蛇行しており、今回の調査地点でも北から北東方向へ向きを変えている(2008年2月、医学系実験研究棟Ⅲ期改修に伴う基礎学B棟西側貯水槽敷設工事立会調査)。

砂礫層に含まれる拳大の礫には、多数の四国山地奥部の御荷鉾帯や秩父帯由来の、緑色岩や粘板岩、赤色頁岩、硬質砂岩といった岩石が多量に認められる。このことは、この流路が三波川帯結晶片岩のみからなる、眉山の谷由来のものではなく、四国山地に水源をもつ鮎喰川の開析流路のひとつであることを示している。

庄・蔵本遺跡一帯は、弥生時代前期中葉～中期初頭にかけて、幾度もの洪水を受けているが、今回の開析流路からの氾濫はみられない。開析流路の中層～上層は、グライ化した粘土層が顕著な滞水層である。出土遺物は、上下層であり時間差がみられないことから、開析後、さほど時間をおかないうちに、排水不良に陥り、埋没したものと推察される。

調査地点付近は、水田域であった前期前葉～中葉とは異なって安定化しており、居住域となっている。弥生時代初頭の可耕地は、ほぼ失われたとみてよいだろう。弥生時代後期後半から終末期の水田域は、より北側の低地に存在していた可能性は残る。しかし、そこは、吉野川本流の影響を考慮に入れねばならない。また、鮎喰川の下流側では、排水の問題や海水準との兼ね合いもあって、開発は容易ではなかったものと推察される。少ない可耕地での灌漑水田のみでは集落経営は困難であったに違いない。今後は畠作を考慮にいれたうえで、調査を進めるべきであろう。

今回の資料によって、庄・蔵本遺跡一帯の地形環境変化、景観復元に関する貴重な情報をえることができた。今後の調査および報告書作成に積極的に活かしてゆく所存である。

文献

徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室2008『庄(庄・蔵本)遺跡―徳島大学蔵本団地動物実験施設建設に伴う発掘調査報告書―』



重機掘削



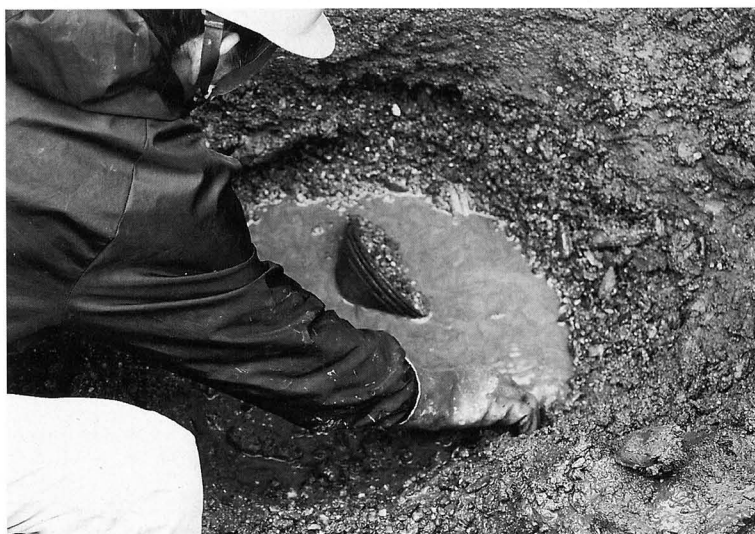
第1遺構面検出溝 SD01



作業風景



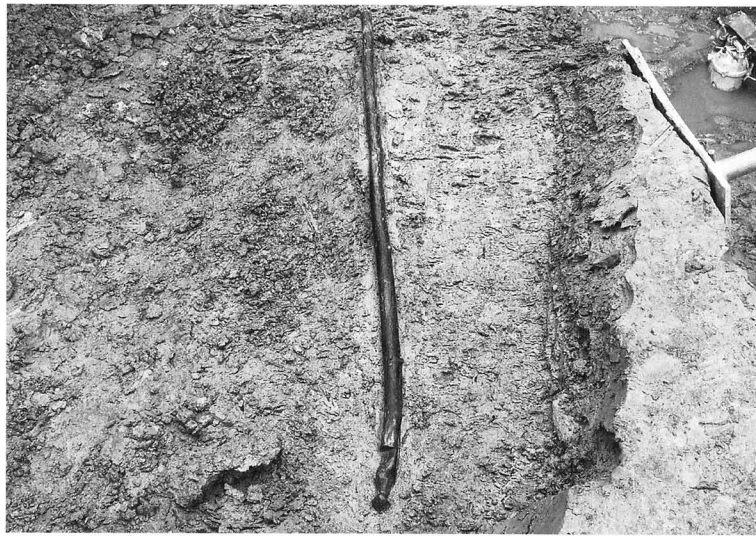
作業風景



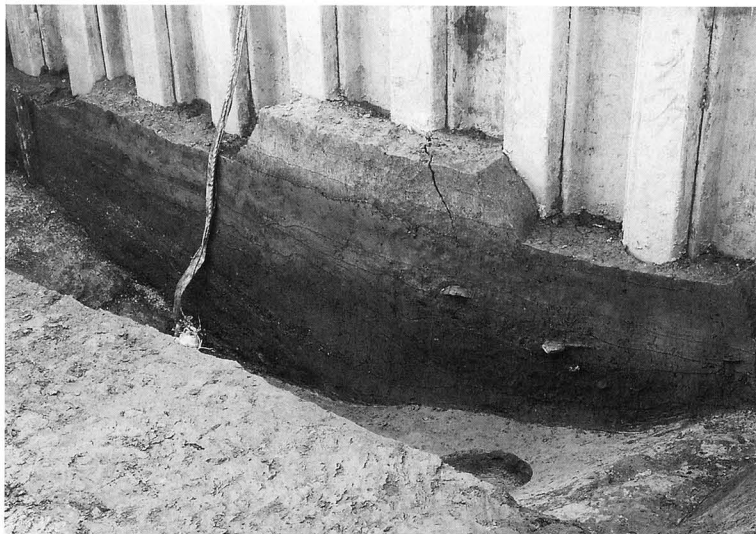
開析流路 SR03 土器出土状況



同木製品出土状況



開析流路 SR03 木製品出土状況



開析流路 SR03 土層堆積状況



完掘状況